

姚名達の内藤湖南宛て第一書簡について

——内藤所蔵の『章学誠遺書』に関する最初の借用請求

陶 徳 民

近著『日本における近代中国学の始まり——漢学の革新と同時代文化交渉』（関西大学出版部 二〇一七年三月）の第六章「内藤湖南の章實齋顕彰に刺激された中国の学者——胡適・姚名達および張爾田との交流について」で、北京清華學校研究院の姚名達（字は達人、一九〇五—一九四二）の内藤宛て書簡を紹介した。

拜啟 去年十二月二十四日郵上燕箋 乞京都宏

文堂八坂淺次郎案下轉渡 不知已達

玉案下否 至今未得

復示 甚念念也 昨到文化事業總委員會 敬悉

先生將以三四月來北京 私心喜極 屆時當謁

教耳 名達學習 大邦文字過遲 近始能讀

大著 既感

先生治學之勤 益我之厚 又知

先我而作史學史也 佩仰之至 三年前立斯志 不

圖遙與海東 先輩暗合 擬俟

大著出版 當逐翻之 即祈

閱校 以餉弊國後學 其功效當較拙著尤大

耳 名達校讀章學誠先生之書 於今三年 尚欲

敬求

寶藏章氏遺書抄本一校 並思得京都某店

朱少白自筆文稿一讀 不知

先生能慨助之乎 抑俟四月來蒞 遂携示之乎 近來

大著有關於章先生者否 拙著章實齋之史學正

在起草 敬祈

多賜教言 俾免誤解 拙著之已成者 甚願寄呈

請教 在今日弊國 欲得一學精路同之先輩如

先生者 上天下地不可得也 故孺慕心仰於

先生為特深焉 臨啟神馳 佇候明教

內藤湖南先生 玉案下 後學姚名達拜啟

一九二八年一月十一日 北京清華學校研究院

姚名達は梁啓超の高弟であり、胡適が内藤湖南に追隨して作った『章實齋先生年譜』を補訂し、自分の『章實齋年譜』を加筆するために、内藤所蔵の由緒ある鈔本『章学誠遺書』十八冊を参考しようとした。書簡のなかで、内藤の指導と資料提供を求めると同時に、「貴国の文字を学習することが遅すぎて、最近になって始めてご高著を読めるようになり」、「先生が私より先に史学史を作ったことを知り、敬服の至りである」、「今日の敝国において、先生ほど学問が精緻で専門も同一の先輩を得ようとして、どこへ探しても得ることが不可能である」と書いている。

よく考えてみると、これはいわば、姚名達の内藤湖南宛て第二書簡であり、なぜならば、書簡の冒頭に、昨年十二月二十四日に京都宏文堂の八坂淺次郎に一通の書簡を送ったことがあり、それは八坂氏に内藤へ転送するように依頼したものであると書かれている。その書簡こそが、姚名達の内藤湖南宛て第一書簡である。しかし、近著を纏めた当時、第一書簡を見つけなかったのも、関係性の非常に強いこの二通の書簡を一括で論じることができなかった。最近になって、ようやく関西大学図書館内藤文庫に収蔵されている同書簡を目にする機会を得たため、ここにおいて、その全文を掲載することにしたい。文中にもともと句読点がないため、筆者の判読に基づいて一字明けという形で意味の分節化を図った。

(封筒)

日本 京都市

上京區 丸太町

通寺町東入

弘文堂書房

八坂淺次郎先生 轉渡

內藤虎次郎先生 殿

一九二七年十二月二十四日

(北京清華學校) 研究院姚名達 械

(本文)

拜啟 久傾

鴻碩 無緣親炙

教言 每殷懷慕恭維

杖履 綏和

門庭鬱蔚 是頌是祝 名達史學後生 竊幸同道 自前年初及

梁任公 王靜安先生之門 即發心著中國史學史 且致思於章實齋先生

之學 三年來孜孜無倦 頗有著述 然除小篇已成定論 間付

發表外 長篇鉅著秘存諸笥而已 又以學習

貴國文字過遲 近日始獲解讀

先生大作 如章實齋先生年譜之屬 又得知

近著中國史學史不日出版 喜慰逾望 未圖志業相同之 若是

其愜合也 章學竊所素嗜 雖未讀

先生紹介之言 而研探所得 除適符外 亦有為

先生等所未見或未知者 如史籍考在武昌輟業 畢秋帆捐館

之後 實齋奔走經營 卒藉謝蘊山之力 開局杭州以成之 今

遺書之史考釋例 即用蘊山語氣 而兩浙鮑軒錄補遺及

瀛舟筆談尤明載其事 且其書似已告成而未付刊 不知稿落何

所 竊嘗訪諸章謝兩家 亦無有也

先生倘能博訪之於

貴國乎 竊欲為續成之 則力有不足 脫稿無日 然亦已有把握

矣 實齋又著有紀年經緯考一書 死後有人刻之 誤題其姓為

張 百年來無人知之 傳本亦少 近日名達始得假讀之於藏書

家 為作序文 商請劉翰怡先生付雕 不日且出板矣 劉氏嘗

於辛酉壬戌間刻章氏遺書 其文有出於

先生藏本之外者 故

先生等所作年譜 仍有遺漏 且乾嘉學者之文集詩集 多有實齋史

料 未蒙

採取也 胡適之先生所作 尤多主觀而不顧事實之批評 而紀載間

亦錯誤 名達自客夏返里 輒另草創一實齋年譜 自謂頗翔實而

簡潔 故嘗刊之國學月報第四期 今秋始得讀

先生大作 而悔改作之無謂也 然敝國人之得見

大作者固少 而拙著又將附章氏遺書而行 則亦無妨耳

先生嘗謂將再著書以論實齋之學術 不知已脫稿刊行否 名達亦正作

文 竊願先領

雅教為幸 鄙頗殫思於實齋學術之淵源 故極注意邵念魯與朱

竹君 已為二先生各作年譜 前者之卷上 已刊入國學論叢第二期

後者則未發表 倘此次幸蒙

函教 得知

住址 則擬將所有著作之有關於實齋者 挂號郵呈 以乞

斧正焉 章氏遺書 名達所見已十餘種 擬借得所有抄本 費半年之力以

精校之

先生所藏抄本 亦擬懇

賜郵寄 誓當珍持愛惜 不敢示人 校畢即當寄還 不失信也 然此

必待名達已見信於

先生以後 此非其時耳 劉氏抄本則不日可寄到矣 拙著史學史尚

無脫稿之期 刻正編纂史籍考 俟其告成 然後可為史學史 故

竊望

偉著之速成 俾得有所稟承焉 俟深通

貴國文字而後 且欲敬懇

先生許其翻譯為漢文也 今年敵國內亂 不特經濟困難 學術

亦日浮薄 即如名達抱此發展史學之志 求師友於全國 蓋未

得一二 幸及^梁王之門 而梁病王沒 可為傷心 見嘗告友人以著

史學史之事 贊其議者未聞也 何幸海外竟有

前輩 先我為之三年 沉悶一朝為

先生所解除 快欣之極 即欲東渡就

教 而留居之費用 又非貧家所能供給 其為悵惘抑何如哉

幸素得聞

先生雅量大度 於王靜安師 故竊不揣冒昧 致書於

閣下 冀邀如師生親炙之

教言焉 王師既沒 鄙於國學月報出專號以紀念之 不日出板 當呈

政也 專此敬上

内藤湖南先生玉案下

海西嶺南後學 姚名達拜啟（印）

一九二七年十二月二十三晚即丁卯十一月三十燈下

本稿においては、この書簡に関する詳細な分析を行う紙幅上の余裕がないため、とりあえず両書簡の事実関係と相互関係について、次のようなことを指摘しておきたいと思う。

まず、一九〇五年生まれの姚氏は、この第一書簡を発信した一九二七年十二月という時点で、わずか二十三歳という若さであった。その姚氏は、当時中国のトップクラスの清華学校研究院の大学院生であり、しかも超一流の大学者である梁啓超および王国維の門下生となった。新進気鋭の若手研究者としてすでに頭角を現している。確かに、書簡中の自己紹介のように、己の『章實齋年譜』を『國學月報』第四期に、章氏生前の友人である邵念魯（二雲）の年譜を『國學論叢』第二期に発表しているほか、章氏生前のもう一人の友人である朱竹君（少白）の年譜も作成している。ただし、天才的ともいえる姚氏は、自己尊大の嫌いがあり、自分の未発表原稿を「長篇鉅著」と表現し、また己の調査結果で判明した数種類の章氏の遺稿は、内藤が「未だ見たことのない」、「未だ知らない」はずのものであると、約四十歳年上の内藤に宛てたこの書簡中に、丁寧さを欠いた言葉を使っている。

第二に、この第一書簡において、内藤所蔵の『鈔本章学誠遺書』十八冊を参照するための貸借を申し入れているが、姚氏の考えていた貸借方法はなんと、国際郵送であった。すなわち京都在住の内藤から北京在住の姚氏への送付である。貧乏書生の自分は国際旅費と訪問期間中の滞在費をととても負担できないというのがその理由であった。しかし、

内藤秘蔵の貴重書が万が一、郵送途中で紛失するというようなリスクについては、若輩の姚氏が全然考えていなかった。いうまでもなく、姚氏の請求はそれなりの背景もある。それは、内藤と師の王国維との長い友情である。しかし、同年六月に王国維が不幸にも亡くなったため、恩師に紹介状を書いてもらう可能性もなくなった。自分で書かないといけない姚氏は、書簡の最後に、恩師の逝去に触れ、恩師に対する内藤の厚情にも言及している。

そして、第二書簡は、第一書簡を出した三週間未満の一九二八年一月十一日に書かれたものである。そのきっかけは、その前日、北京にある東方文化事業總委員會を訪ねた際に、内藤は、同年春の三月か四月に、北京訪問する予定があるという消息をキャッチしたためである。したがって、姚氏は、できれば、その時に「携示」（すなわち持参）できればと依頼したのであった。結果的には、内藤は、この若い秀才の姚氏の二通の書簡に返事をしなかったようである。にもかかわらず、姚氏は、内藤に対する敬意は減退することなく、己の補訂した胡適の『章實齋年譜』を内藤に進呈し、その本の扉に「内藤湖南先生教正 姚名達敬贈 大中華民國二十年十二月」（一九三一年十二月）と書いている。また、同書の口絵として掲載されている「章實齋先生夫婦遺象」の裏側に、「此像得自紹興章氏祖堂 時為中華民國十九年四月 姚名達攝製」と題辞している。そして、同遺象の横に、「姚達人先生熱心搜求實齋傳記材料、果然訪得此像 可謂有志者事竟成了 胡適敬記 十九（年）九（月）廿八（日）」（胡適の記載に「年月日」の字はなく、漢数字のみ）という胡適の賛辞も書かれているのである。今となって、この一冊は一九三〇年代初期の中日文化交渉を物語る貴重な文物となっているとも言えるだろう。

◎本稿は、日本學術振興會科学研究費・基盤研究（B）（一般）「泊園書院を中心とする日本漢学の研究とアーカイブ構築」（研究代表者：吾妻重二 課題番号 18H00611）による成果の一部である。

章實齋先生夫婦遺象



姚達人先生熱心搜求實齋傳記材料，果然訪得此像，可謂有志者事竟成。胡適敬記

此像得自紹興章氏祖堂
時為中華民國十九年四月
姚名達攝製

內藤湖南先生教正
姚名達敬贈

大中華民國二十年十二月

中國史學叢書

何炳松主編

章實齋年譜

胡適著
姚名達訂補

商務印書館出版